BROADCASTING CREATORS' ASSOCIATION OF JAPAN

放送人の会

No.55
2012.3.19

〒102-0094 千代田区紀尾井町１－１ 千代田放送会館 ３階
Tel&fax03-3221-0019 Mail info@hosojin.com 代表幹事 今野 勉
編集担当 伊藤雅浩（会報編集長）、鈴木典之、前川英樹（ＨＰ担当）、松尾羊一 事務局 佐藤 真美子

「放送人」と「ネット人」のこと

代表幹事 **今野 勉**

「放送人」という言葉は、１９６１年に、文化人類学者の梅棹忠夫氏が初めて使ったものであることは、以前、この欄でも述べた。

「新聞人」に対する言葉として、放送事業の従業員を指すこの言葉は、当時、紛れのない、確かな輪郭を持っていた。

昨年暮れ、私は、インターネット・テレビに出演する機会があった。ユー・ストリームのＣＯＭＯＳ・ＴＶである。３人の出演者による鼎談で、番組タイトルは「思想としてのテレビ」。

その内容を紹介するのが本稿の目的ではない。ネットを通じて生中継されたその番組の「スタジオ風景」が、思いがけなくも「放送人って何だ」という問いかけを私につきつけてきた。そのことについて述べてみたいのである。

スタジオは、スタッフの1人のアパートの1室。ふだんは居間として使われているようだった。スタジオには、1台の小型ビデオカメラとカメラマン。その前に横一列に私たち3人の出演者が並ぶ。背中はすぐ壁である。

3人のうち1人は、パソコンを操作しながらの出演で、画面に写らない場所でもう一人パソコンを操作するスタッフがいる。実際に放送にかかわっているのはしたがって計3人である。

ＣＯＭＯＳ・ＴＶの運営者であるらしい30代の男性は、赤ん坊を抱いて居間（スタジオ）に続く一段高いダイニング・キッチンにいる。奥さんが時々赤ん坊をひき取っている。

ネットで募集した観客が10人ほど、スタジオとダイニング・キッチンの椅子やフロアに座っている。

モニターが2台。小さなモニターにはカメラがとらえたと同時刻の映像が写っている。大きなモニターには、カメラがとらえた映像をいったんダウンロードしたあとの、ネットに送信される映像が写っている。

ネットによる生中継は、いったんカメラの映像をダウンロードし、それの再生が送信映像になる。したがって、小さなモニターの映像は、数秒遅れて大きなモニターに写し出される。

地上波やBSの生放送とは、このズレだけが違うだけで、大と小の違いはあれ、この居間をスタジオとした生中継は、れっきとした放送である。

つまり、個人経営の、というか、グループ運営の、と言った方が正しいのだろうが、テレビ局なのである。

この制作者たちは「ネット人」と呼ばれているかもしれないが、でも、紛れもない「放送人」なのではないか、という思いが、中継中の3時間、ずっと私の頭を離れなかった。

「放送人って何だろう」。

私は、このユー・ストリームの番組に出演して以来、考えざるをえなくなってきた。

梅棹忠夫さんは、「放送人」を新人種と言ったが、現在の新人種である「ネット人」は、もちろん、インターネットの使い手であって、その眼目は、個々人の間の交信である。

だが、この人種、あきらかに、ある分野で、「放送人」と重なり合う人たちではないのか。

ＣＳ、すなわち、通信衛星による映像配信は、現在、放送衛星による放送と実質的に変わりがないと同じように、ネット・テレビもまた実質的に「放送人」と変わらない作業をしているのではないか。

「放送人」の定義を、考え直さなければならない時期に来ているのかもしれない、と、以来、私は思うようになった。

それが「放送人の会」とどうかかわることなのか、それは、また、別の問題であろうが、現状を認識し、未来を見通すためには、心の隅に刻んでおく必要がある、というのが、私の直観である。

と書いてきて、少し大仰かな、と反省したりもしているのだが、正直に言うと、あの、居間をスタジオにして、赤ん坊を抱きながら、伝えたいことを伝えていくという行為をする若者たちの姿に、放送人の原点を見る思いがして、心が揺すぶられたその気持ちを、ちょっとだけでも会員の皆さんと共有したいと思って述べてみた。

特別な年の放送人グランプリ

堀川とんこう

去年の３月からの１年は、日本の歴史にとって特別な意味を持つ１年になるだろう。大震災が人々の生活に与えた甚大な影響は今後も長く尾を引いて人々を苦しめるだろうし、原発事故の被害は、現時点ではその大きさを特定することさえできず、22世紀へ世紀を越える災害になるのを覚悟しなければならない状況だ。

「この１年に放送は何をしたか」

「放送は、今日も間違いを犯し続けているかもしれない」

５年後、10年後に「果たされなかった放送の責任」というような検証番組を作っていないことを祈るのみだ。

今年度の「放送人グランプリ」は、そういう特別な年の顕彰ということになった。選考には慎重を期すと同時に意欲をもって臨みたい。

会員の皆さんが推薦番組を検討する際にも、災害関係の番組が多く検討対象になるだろう。先の芸術祭ドキュメンタリー部門などでも、震災、原発事故に関するものが多かったが、「放送人の会」はどういう視点で番組制作者に拍手を送り敬意を払うのか、放送人としての見識や情熱が表われるところなので、会員の推薦投票は大変興味深い。３．11以降のどの時点で制作されたものを選ぶか、地震・津波から選ぶか、原発から選ぶか。どこかに、小さな賞でも来てくれれば制作が続けられる、というような励ましの必要な制作者がいるだろうか。

下馬評座談会でもいわれているが、ドラマ関係は比較的不作だったようなので、今年は報道が独占するかもしれないが、それはそれでこういう年にふさわしいかもしれない。

「放送人グランプリ」も回を重ねてきて、賞を出す方の歓びや感動は新鮮さを失いがちだが、授賞式の日の受賞者たちの顔を思い出すと、力が湧いてくる。彼らは、偽りなく実に嬉しそうにしてくれる。賞金が出るわけでもなく、大ホールでの表彰式があるわけでもないのだが、彼らは間違いなく何かを受け取って帰る。それは先輩たちが自分の仕事に、自分のあり様に敬意を示してくれたという、他では味わえない歓びなのだ。毎年それを感じる。

例年申し上げていることだが、審査委員会が選考の指針とするのは、あくまでも会員の投票である。下馬評座談会や資料を参考に一年を振り返って、是非とも多くの会員の投票をお願いしたい。

と同時に、受賞する後輩たちに是非先輩の顔をみせてやってほしい。後輩を誇らしく思っているぞ、という顔を。総会と授賞式へのご出席をお願いしたい。

恒例・放送人グランプリ下馬評座談会

放送人グランプリのノミネートの締切が迫っていますので、その前にこの１年の放送についてのデータを提供します。番組紹介が目的で、注目された番組、制作者の周辺を紹介しますが、評価は会員それぞれと選考委員にお任せします。推薦の目安にしてください。

【総論的に】

Ａ ３・11の報道をめぐって、地震直後はジャーナリズム機能と災害救済報道の２つの役割が求められ、地元民放とネットワークニュースが相反する緊張関係におかれ、地元民放の現場にそれが集約された。

Ｂ ３・11では地域を系列ネットに組み込むシステムでは捉えきれない情報が被災地にはある。

Ｃ キー局の目線でなく、地域だけの情報でもない被災地中心の《３・11》取材を長期にわたり続けているうちに、東京の見方に偏しない《３・11の全国化》という視座がうまれた。

Ｄ そこで生まれたのが３・11報道に特化したＪＮＮ三陸臨時支局だ。

Ａ とくにラジオだ。臨時免許をえてコミュニティー局をいくつも立ち上げ、地元局ＯＢやボランティアが県域局ではカバーしきれない地域ニュース、安否情報、生活情報に徹した。

Ｂ ぼくは地デジ促進にわたり関わったものだが、放送波というインフラの変更は、放送そのものの捉え直しを迫るもので、そうした基本的な問題を放送局経営者は考えるべきだと思っていた。しかし、それよりソーシャルメディアの進展が凄くて、地デジ云々より放送メデイアのあり方がもっとはっきり問われているのが現状だ。３・11以後の情報は海外ではネットで知ったケースが多い。初期の混乱を経て、３・11報道はマスとソーシャルが相互乗り入れ風な着地点が見えるようになった。

Ｃ 現場ではむしろソーシャル系端末を駆使し、あたらしい報道コンテンツがうまれはじめている。

Ｄ 話は逸れるが、「調査情報」が去年５・６月号（隔月間）で創刊５００号を迎えた。沢木耕太郎などのユニークな執筆者を育てＰＲ臭のない文化雑誌だが、バブル禍もあって一度休刊になり、復活した。

Ａ あの雑誌から中央論壇ではほとんど無名な評論家や学者が出た。

Ｂ 同じ意味ではＥＴＶ特集枠の「新世代が解く！ニッポンのジレンマ」を挙げたい。「朝まで生テレビ」は感情あらわの不毛な論議だが、ここでは７０年代生まれのロスジェネ世代の実践型エリートたちを集め価値観の転換期らしいディベートが話題になる。

Ｃ 70年代生まれのサブカル研究者、ＩＴ投資ファンドをとりしきる人、地方大学の准教授などだ。クールに喋っている。態度が大人なのだ。新しいタイプのディベート番組として注目したい。

D　では本筋に入り、まずドキュメンタリーから。

【ドキュメンタリー】

A　当然のことながら、震災関連が圧倒的に多い。国もメディアも災害の大きさに動転した上に、撮られた映像記録の量も未曾有だ。地震も津波も同時中継、しかも個人のケータイ、デジカメの映像がどんどん放送された。

B　茫然自失。大震災の意味を映像の洪水と衝撃の中で探ろうとしていた。

C　16年前の阪神淡路大震災では、地震の最中の映像はワンカットしか放送されなかった。メディア史上、今回の報道は画期的だ。

D　玉石混交の情報の洪水の中で、NHKが早々と緊急必要情報を整理し、「クローズアップ現代」を基点に統一的に流したのはさすがだった。

A　政府の対応の不手際と混乱が続く中、ETV特集「ネットワークでつくる放射能汚染地図」（5月15日）の登場は衝撃。当局の情報空白と隠蔽を衝いたスクープ番組で誰もが驚いた。

B　当初4月3日放送の予定が、上からの許可が下りず、「玄侑宗久・吉岡忍対談、原発災害の地にて」に差し換えたという。しかし、この対談は現地の深刻な汚染状況と情報空白を明らかにし、予告編的役割を果たした。

C　「汚染地図」の視聴率は1・8％だったがネットや電話の反響がすごく、すぐ再放送された。ETV特集は滅多に再放送されない。

D　お上の放射能汚染情報がこの番組を機にようやく公開されはじめた。番組自体は冷静なデータ告知の形だったが、それが反って真実性を持ち、現地の人の判断にも役立った。政府・東電の〝大本営発表〟を覆した点でも殊勲甲の大金星だ。以後NHKの専門チーム編成による汚染問題摘発番組が次々と世論をリードする。

A　「汚染地図」シリーズは、この3月までに5回続き、「海のホットスポットを追う」（第4回）、「ヨウ素による初期被曝の追求」（第5回）はスクープだ。

B　外部の専門家頼りの民放では作れない。

C　ETV特集を仕切っているのは増田秀樹P。

D　Nスペでは「果てなき苦闘　巨大津波医師たちの記録」（7月2日）が現地医療関係者の修羅場対応の果敢さを印象付けて感銘深い。若い取材記者の熱意は天晴れだ。

A　Nスペは「〝世界最大〟の液状化」（7月10日）、「巨大津波　その時ひとはどう動いたか」（10月2日）、「帰宅困難者1400万人」（10月9日）、「原発事故あの時何が〜同時進行ドキュメント官邸と住民・完全再現」など、首都圏を含め、今後のための問題指摘が適確。

B　ETV特集「アメリカから見た福島原発事故」（8月14日）、「原発事故の道程」前・後篇（9月）、「埋もれた警告」（12月11日）などは、原発導入時の日本の対応のまずさを描き、今更ながらキモが冷える。〝安全神話〟でフタをした罪は重い。

C　民放では、TBSとJNN系列局に

ドキュメンタリー

11年4月

ETV特集「原発災害の地にて〜対談　吉岡忍×玄侑宗久」
Nスペ「“いのち”をどうつなぐのか医療現場からの報告」
ETV特集「医療崩壊地帯を大地震が襲った」
NNNﾄﾞｷｭﾒﾝﾄ「大震災から１か月　津波にのまれた女将」（テレビ岩手）
邦画を彩った女優たち「高峰秀子と昭和の涙」ほか

5月

ETV特集「ネットワークでつくる放射能汚染地図
　〜福島原発から２ヶ月」　その続報（４回シリーズ）
テレメンタリーシリーズ３：11を忘れない
(2)「家族を見つけたい〜原発３０キロ圏の捜索」(福島放送)
Nスペ「巨大津波“いのち”をどう守るのか」
Nスペ「クジラと生きる」

6月

ETV特集「今こそ力を束ねるとき
　〜神戸・災害ボランティアの記録」
報道の魂「3:11大震災記者たちの眼差し」1~2
　(TBS　JNN系列15局12人　オムニバス)
NNNﾄﾞｷｭﾒﾝﾄ大震災シリーズ6
　「原発爆発　安全神話はなぜ崩れたか」（日テレ）
Nスペ「ホットスポット最後の楽園」6
　「日本私たちの奇跡の島」福山雅浩紀行
映像11「その日のあとで〜フクシマとチェルノブイリの今」（毎日放送）

7月

Nスペ「果てしなき苦闘　巨大津波　医師たちの記録」
ETV特集「大江健三郎　大石又七　核をめぐる対話」
Nスペ「シリーズ東日本大震災“世界最大”の液状化」
ETV特集「この世の息〜歌人夫婦４０年の相聞歌」
　河野裕子と夫
「上を向いて歩こう〜日本人の希望の歌、その真実」(NHK)
Nスペ「飯館村〜人間と放射能の記録」
ﾃﾚﾒﾝﾀﾘｰ「3:11を忘れない」６「古文書が語る巨大津波」（朝日放送）

8月

Nスペ「原爆投下　活かされなかった極秘情報」
金曜プレステージ「わ・す・れ・な・い
　東日本大震災１５５日の記録」（フジ）
戦争証言プロジェクト「封印された大震災・愛知半田市」（NHK）
ザ・スクープスペシャル「日本の一番長い日の真実
　〜誰も知らない玉音放送」（テレ朝）
Nスペ「圓の戦争」
ETV特集「アメリカから見た福島原発事故」
Nスペ「日本人はなぜ戦争へ向かったのか」戦中編
　「果てしなき戦線拡大の悲劇」
「証言記録　日本人の戦争」前後編(NHKBS-1)

9月

ETV特集「おじいちゃんと鉄砲玉」
明日への再起の記録「めげてらねっちゃ
　〜気仙沼南町人情商店街の奮闘」(NHK)

よる「報道の魂・3・11大震災　記者たちの眼差し」Ⅰ〜Ⅲ（6月5日〜9月10日）が印象的だ。被災地各局の記者たち20人の個人体験と視座にもとづくオムニバスで、〝当事者報道〟ともいえる新味が共感を呼んだ。被災地以外の局の記者も加わっていて、その距離感が微妙に正直に出ていた。

D　「JNN三陸支局」を新設して、現地密着の実情アピールを続けるという。

A　日テレのNNNドキュメント枠、テレ朝テレメンタリー枠も系列局を動員してシリーズ化し、頑張った。「津波にのまれた女将」（テレビ岩手）、「続・命てんでんこ」（岩手朝日テレビ）、「家族を見つけたい〜原発30キロ圏の捜索」（福島放送）などが印象深い。

B　日テレの「原発暴発　安全神話はなぜ崩れたか」は民放の少ない原発ものの代表だ。

C　フジの「わ・す・れ・な・い　東日本大震災155日の記録」は1級資料だ。

D　総じて民放には被災地から全国へ発信の目線の構成が多いが、現地で活用されることも大事だ。今回ラジオとケータイが機能しない状況が続いた。

A　震災1周年の3月11日は全局特番ラッシュだった。前日10日夜のNHK総合「3月11日のマーラー」は震災当夜東京で開かれたクラシック演奏会の異常で劇的な様子のドキュメント。日フィル演奏者93人に客席は105人。余震の続くがらがらの会場にマーラーの交響曲第5番の鬼気迫る名演が響き渡り、舞台の上下が一体となって熱狂の雰囲気につつまれた。帰宅困難で指揮者（ダニエル・ハーディング）を中心に全員が共に会場で夜を明かした。意表をつく展開、「ガンバロウ」も「絆」も言葉としては使われていないが、見ていてゾクゾクと来た。震災の癒しを音楽で、という企画は多かったが、白眉はこれだろう。

B　震災のおかげで、便利さや効率を追い、自然を忘れがちな生活意識への反省も強まった。Nスペが〝焼畑農業〟という古代から続く自然農法を取り上げた「クニ子おばばと不思議の森」（9月25日）に予想外の反響が出た。映像詩のような、自然との共存に深層心理を揺さぶられたのだ。ちなみに四季を通じて定点観測をした制作者柴田昌平は、元NHKで民俗映像作家姫田忠義に師事した人。「サヨばあちゃんの無人駅」（静岡放送・12月28日）も同じで、震災がなければ見逃しただろう。

C　8月の戦争特番は今になって〝真相はこうだった〟で、考え込ませる作品が目立った。

D　Nスペ「圓の戦争〜国策銀行・封印された記録」（8月14日）は戦費調達のペーパーマネー乱発のからくりを検証した。経済面から戦争の狂気を摘発したのは初めてではないか。金融犯罪リーマンショックに連なる奇怪な錬金術で、財務省の帳簿上はまだ清算されていない。

A　Nスペ「原爆投下　生かされなかった極秘情報」（8月6日）は原爆投下の事前情報は握り潰された、長崎投下は回避できたはず、というショッキングな検証。NHK広島局の情報発掘はさすがだ。

B　終戦前年の東南海地震の大災害の真相を明かした「封印された大震災　愛知半田市」（8月10日）もそうだ。地震の翌日が12月8日の開戦記念日で、天皇の写真を載せるので情報は握り潰された。名古屋の中島飛行機の工場だけで勤労動員の生徒男女2，000人が死んだという情報が今もはっきりしない。

C　BSプレミアム「戦争証言スペシャル運命の22日間〜千島サハリンはこうして占領された」（12月8日）は、8・15直後のソ連軍千島・樺太侵攻を日・ソの軍人と民衆が証言した秀作。双方に悲惨な事実と「目的がわからなかった」と元ソ連兵が涙するなど、国策の空しさがつのる。

D　テレ朝・ザ・スクープスペシャル「日本の一番長い日」の真実、誰も知らない玉音放送」（8月14日）は、以前ETV特集でも扱われたが、天皇のラジオ放送が唯一の終戦の決め手だったという指導者のだらしない内幕の暴露だ。

A　歴史的視座で日本と中国の深い人的交流を立証した3回シリーズ「辛亥革命100年」（11月、NHK）は作り手が近代の〝思想史番組〟と自称する珍しく壮大なスケールの教養番組だ。福沢諭吉、中江兆民、田中正造、南方熊楠、幸徳秋水、堺利彦など明治から大正にかけての大物を並べ、リポーターの菅原文太、西島秀俊、クリスティーヌ・レヴィ（幸徳の研究者）などがハマリ役で見応えがあった。なにより制作陣の猛勉強ぶりが伝わってきた。

B　東海テレビ「死刑弁護人」（10月9日）は、光市母子殺人事件など難事件ばかりを敢えて引き受ける死刑廃止論者の弁護士・安田好弘の生活と意見。この局の阿武野・斉藤コンビの司法ものはいつも光っている。

C　ETV特集「花を奉る　石牟礼道子の世界」（2月26日）は、最終的解決かで今注目を浴びる水俣病に取り組む石牟礼さんの世界が詩的にさわやかに謳いあげられた。上田早苗アナのインタビューと朗読がいい。

D　ふつうの日常的番組は影が薄いがNスペ「クジラと生きる」（5月22日）は忘れがたい。シーシェパードの横暴に耐える和歌山・大地町民の窮状に息が詰まる。

A　フジの金曜プレステージ「勘三郎密着！涙の復帰スペシャル」（11月4日）は難病から再起を果たす歌舞伎界の大黒柱の執念。ETV特集「この世の息〜歌人夫婦40年の相聞歌」（7月10日）は歌人・河野裕子の最後の日々をみつめた。

B　ETV特集「この世の名残夜も名残〜杉本博司が挑む『曽根崎心中』オリジナル」（10月16日）は国際的に活躍する現代美術家杉本博司の創意に文楽界が前面協力するドキュメント。

C　朝日放送「誰も聞いてくれない〜レイプ被害者を告発した障がい者」（1月23日）は被害者本人の姿勢にも感動するが、司法の対応過程をきちんとチェックした制作者の姿勢にも注目。

D　裁判ものではTBS報道の魂「死刑をまぬかれた男たち」（2月12日）があ

る。

【ドラマ】

A　一般論として３・11以降は、震災を意識せざるを得ない内容が多い。突然の喪失感に人はどう対処するか、家族はどうなるか、人間の結束は?家族の再生と絆の再認識を強調したようなドラマが目立った。

B　都市文明の視点から震災（特に原発）が自然（東北＝田舎）を滅ぼす重い構図がドラマに読み取れた。地方から中央を中央が地方を凝視する視座。

C　各論に入るとＮＨＫの大きな特色は、地方局開局周年事業にドラマの場を提供したこと。例えば「見知らぬわが町」（福岡）「恋するキムチ」（岐阜）「続・遠野物語」（盛岡）「オヤジバトル」（福岡・北九州）「大地のファンファーレ」（札幌）「港町相撲ボーイズ」（富山）など。

D　それは最後に触れるが、各賞受賞作ドラマでも言えることだ。

【単発・異色ドラマ】

開戦70周年でもあって、いつもは終戦記念番組に消極的な民放作品が出揃った。

A　終戦ものではまず「この世界の片隅に」（広島テレビ）。浅野妙子の本で北川景子。軍港呉の三業地の少女をめぐる悲哀編。これも異色広島もの。

B　軍用徴用犬にされた一家をめぐる「犬の消えた日」（日テレ）。あの頃は大型犬のシェパードを飼うのが流行ったが、徴用される犬をめぐる悲劇は愛犬家にはたまらないだろう。

C　沖縄生まれの兄弟が引き裂かれて戦場で戦う悲劇「最後の絆」（フジ）。鉄血勤皇隊の弟と留学中の兄（要潤）だが、戦場場面の作りはうまい。

D　沖縄ものでは洞窟から下着を白旗がわりに投稿した少女、という有名な報道写真をヒントにドラマ化した「白旗の少女」（テレ東）。成人した「少女」が回想する構成で、黒木瞳

A　戦争を秘話ものとして物語化する傾向が強いが、どうなんだろう。

B　「真珠湾からの帰還～軍神と捕虜第1号」（ＮＨＫ名古屋）がある。真珠湾攻撃で甲標的（特殊潜航艇）が座礁して捕虜となった坂巻和男をめぐり、訓練時代から収容所までを描く。

C　軍神の真実と苦悩か。青木崇高は海軍軍人がよく似合っていた（笑い）

D　話題作では倉本聰の「學」（ＷＯＷＯＷ）と山田太一の「キルトの家」（ＮＨＫ）だが、老人と若者の見方が対照的で倉本は「怒れる老人」代表（仲代達矢）が、今時の若者を切って捨てる小気味よさがある一方、山田は団地の高齢者グループに紛れ込んだ若者夫婦が老いというより、生と死について考え込むという〝山田節〟ドラマで気持ち良く見た。

A　大作もの。「江」（ＮＨＫ）は史実を恐れぬ〝田渕流〝時代劇〟だが賛否両論の話題性はあった。「坂の上の雲」は明治青春編に尽きるのでは。「まことに小さな国」が戦う日露戦争編は将軍たちの作戦対立やＣ・Ｇ構成の画面展開（映像処理は見事）で戦争場面が迫真力に満ち戦場の非情感がでていた。

報道の魂「オムニバスドキュメンタリー
3:11 大震災記者たちの眼差し　2」(TBS JNN)
「東日本震災　６ヶ月取り残される障害者」（Ｅテレ）
情熱大陸「石巻日日新聞」（毎日放送）
飛び出せ科学クン「最後の地球 ㊙ 大冒険スペシャル」(TBS)
ＥＴＶ特集「シリーズ原発事故への道」前編・後編
Ｎスペ「クニ子おばばと不思議の森」柴田昌平

10月
「死刑弁護人」（東海テレビ）
Ｎスペ「巨大津波　その時人はどう動いたか」
Ｎスペ「帰宅困難者１４００万人」
ETV 特集「この世の名残夜も名残～杉本博司が挑む～曽根崎心中」
映像‘11「放射能汚染の時代を生きる」（毎日放送）
ETV 特集「果てしなき除染～南相馬からの報告」

11月
金曜プレステージ「勘三郎密着！涙の復帰スペシャル～闘病そして震災、激動の５５日～」（フジ）
ハイビジョン特集「しあわせのカタチ～脚本家木皿泉　創作の世界」（ＢＳプレミアム）
シリーズ「辛亥革命１００年」３回（ＢＳプレミアム）
ETV 特集「ネットワークで作る放射能汚染地図４～海のホットスポットを追う」

12月
ETV 特集「放射能汚染と闘う米農家」
戦争証言スペシャル「運命の２２日間～千島・サハリンはこうして占領された」
ETV 特集　シリーズ大震災発掘１「埋もれた警告」
２「巨大津波　新たな恐怖」
日本放送文化大賞「サヨばあちゃんの無人駅」（静岡放送）
Ｎスペ「原発事故　謎は解明されたのか」１～４

12年1月
Ｎスペ「日本人はなぜ戦争へ向かったのか」１～４
ETV 特集「なぜ希望は消えた　農政の舞台裏」
Ｎスペ「東北復興を支えたい！神戸の震災体験者東北へ」
「日本人は何を考えてきたのか」１～４回　福沢諭吉×中江兆民、苅宿仲衛×千葉卓三郎ほか東北自由民権群像、南方熊楠×田中正造、幸徳秋水×堺利彦

2月
Ｎスペ「魚の町は守れるか　ある信用金庫の２００日」
ETV 特集「見狼記　神獣ニホンオオカミ」
ETV 特集「花を奉る　石牟礼道子の世界」

B むしろ青春編に脱・司馬遼の明治も入れて再構成した「坂…」をいつか見たい。

C 異色作としては「未解決事件シリーズ　グリコ・森永事件」だ。大新聞記者クラブのスクープ合戦や捜査陣の動きを再現風に迫る意欲作。NHKは「A to Z」的に、世相風俗的な事件ものに関心を示しはじめた。

D 再現ドラマ部分は「クライマーズ・ハイ」もそうだったが、新聞編集局などブンヤ風俗の描写はうまい。

A この事件の特異性を臭わせた巷間で噂の「闇」の領域（同和問題）の信疑に肉薄する姿勢が今一歩だったのは惜しい。

B ドキュメンタリードラマ「雲仙・普賢岳～避難勧告を継続せよ」（NHK）。フランスの火山学者夫妻の遭難をからめて40数人が犠牲となった経緯を時系列的に綿密にドラマ化。記録映画の迫力で火山爆発の恐ろしさが…

C 土曜ドラマスペシャルの「TAROの塔」（NHK）は松尾スズキにソックリさん賞（笑い）。いや、内面演技においてだよ。

D 市川森一の遺作となった「蝶々さん～最後の武士の娘」（NHK）。プッチーニ歌劇の虚構を訂正するというよりも、価値観の転換期にあって武士の娘という規範に殉じた女性を彫琢したシナリオや宮崎あおいの演技を買う。

A 暮れに放送の「愛・命～新宿歌舞伎町駆け込み寺」（テレ朝）は石橋冠監督のホーム・グランドものだが、繁華街の底辺に生きる疎外者たちを助ける篤志家韓国人の玄秀盛の渡邊謙が力演。ドキュメンタリータッチの映像文体が盛り場の渇きを出していた。

B 受賞作品ドラマを挙げよう。

C 「レッスンズ」（芸術祭最優秀賞）は、家庭教師（鈴木杏）と教え子とその家族のアンニュイな関係をいかにも関西テレビのお家芸的な作品にしあげた点を評価したい。

D 娘の結婚を機に妻に先立たれた中年男の周辺に起こる悲喜劇の「初秋」（同優秀賞　CBC）、不治の病の子供を抱えた夫婦の絆を描く「風をあつめて」（同優秀賞　NHK）。

A 「ニセ医者と呼ばれて～沖縄・最後の医介輔」（同優秀賞　読売テレビ）は占領下に医師で通った医師が医師法に触れて苦闘する話で医療の本質に迫る作品で素材がユニークだ。

B 最後にその他話題になったドラマを各局別に紹介すると、NHKは日中合作の「蒼穹の昴」。田中裕子の西大后は中国では大評判だった。

C 向田邦子の「胡桃の部屋」は向田臭が全くしない。意図したのは分かるが、役者がみんなべけんやで（笑い）。

D 日テレでは「デカワンコ」。多部美華子にキテレツ刑事を躍らせた遊川和彦、「ミタ」も遊川だし…

A 「水戸黄門」「渡る世間」を安楽死させたTBSは、「南極」もそうだが、山崎豊子などの大作主義路線「官僚たちの夏」「運命の人」と出来はいまいちだ。「毎朝」だの「読日」の政治記者がからむ永田町ドラマを続ければ大化けするかも…

B フジは「プライド」「月の恋人」などのキムタクが演技的にはっきりしないし、「外交官黒田康作」の織田裕二も「踊る…」の元気がない。尾野真千子も「名前をなくした女神」では張り切りようがなかった。

C 「マルモ」と「それでも生きて」だけ。カムバック！月ドラ。テレ朝は？

D ここは「相棒」と朝日放送枠の「京都地検」「科捜研」のタッグマッチでサラリーマン層をくわえる。

A テレ東は「鈴木先生」の枠を放棄してしまった。惜しい。ここは「名作シリーズ」もそうだったが、辛抱が足りないのでは。

B 結局、おいしいところはWOWOWがさらってゆくのがドラマ構図だ。

【連続ドラマ】

タレントがらみ企画が大半の連ドラを占めるから3・11以前のテーマばかりだったが意外に盛況感があった。

C 話題作は表を参照して頂くとして、まず「カーネーション」だ。「わてのだんじりはミシンや」の糸子（尾野真千子）と作者の渡辺あや。朝のテレビ小説的戦後民主主義ヒロイン像をかなぐり捨てた小気味の良さ。

D 「家政婦のミタ」は昔なら〝ハッタリ・ドラマ〟と片付けられた作りでスマホ・ゲーム時代では、サイボーグ奈々子の動きこそリアルなのだ。

A カブト虫が死んで動かない。今の

松尾羊一氏

鈴木典之氏

渡辺紘史氏

堀川とんこう氏

（撮影　伊藤雅浩）

河野尚行氏

前川英樹氏

ガキは（電池がなくなったの？）と呟くそうだ。つまり電池が無くなった家庭の修理を、「承知しました」と忠実に動くロボットが介助する。

B　命令で殺せばホラードラマになる、という逆説的ホームドラマ〝ミタごっこ〟の勝利。

C　往年の阿部進の切り口、現代っ子ブームを思わせる「鈴木先生」。いじめやワル、金八先生が常連だった教室神話が既成概念を越えた少女の飛躍感によってボロボロになる。

D　業界内視聴率第1位、ビデオリサーチはベスト20も危うい「運命の人」。

A　若者はゼンゼン。それでも往くTBSを支持したい（笑い）

B　本木雅弘は肉体的過ぎて、あんな記者いないよ。

C　山崎豊子ご推薦だそうだが、真木よう子相手なら売り出しの長谷川博巳か、堤真一か。

D　サザエさん的「マルモのおきて」に「11人もいる！」。ホームドラマのドレスアップ気運か。

A　異色連ドラではいずれもBS枠の「テンペスト」と「開拓者たち」。前者は幕末琉球王国の王宮を舞台の沖縄ルーツ物語。沖縄視聴率は常時20パーを越えたという。後者はテムジン協力の満蒙開拓家族史。TVマンユニオンの若手がキューを振るドラマ。

B　遠景にドストエフスキーの匂いがする「それでも、生きてゆく」と「深夜食堂」の小林薫を挙げたい。どこか高倉健の「居酒屋兆治」を思わせるシリーズ佳作。ああ―昭和新宿。

C　震災関連のドラマがやっと現れた。一つは「明日をあきらめない…がれきのなかの新聞社」（テレ東）と「3・11その日石巻で何が起きたか」がある。

D　前者は東北の有力紙・河北新報社の幹部や被災現地で苦闘する記者たち、犠牲になった販売店などをからませて描く。後者は輪転機が水没、発行不能になった石巻日日新聞が手書きの新聞を避難所などに配布する経過をドラマ化した作品。

【バラエティー&カルチャー】

C　まず、変形旅番組の「日本縦断　こころ旅」（BSプレミアム）と「吉田類の酒場放浪記」（BS―TBS）、「ぶらタモリ」（NHK）の3本はどうだろう。

D　63歳のチョイワル火野正平のチャリンコ日本一周。企画の盲点を衝いた。

A　同行4人のスタッフがたえず追尾、まるで黄門様御一行（笑い）

B　地元民に妙に媚びないのがいい。手紙を読みながら、時折ドキッとする言葉を吐く。ナミじゃない。

C　同じ路線で俳人の吉田類。酒好きに

藤久ミネ氏

3月

クローズアップ現代「震災データマップ特集」（NHK）
「映像記録3：11“あの日を忘れない”（NHK）
ETV特集「海辺の町に生き続ける南三陸町・1年の記録」（NHK）
Nスペ「原発事故あのとき何が～同時進行ドキュメント官庁と住民・完全再現」（NHK）
ザ・ノンフィクション「震災3つの家族は今…」（フジ）
Nスペ「港町・人情商店街」（NHK）
「3月11日のマーラー」（NHK）
池上彰スペシャル「世界が変わった日～あの震災から1年」（フジ）
ETV特集・ネットワークでつくる放射能汚染地図⑤「埋もれた初期被曝を追え」（NHK）
復興テレビ　みんなのちから3・11（日テレ）
朝まで生テレビ・スペシャル「原発事故から1年！教訓と課題」（テレ朝）
Nスタ×NEWS23クロス「3・11絆スペシャル」（TBS）

ドラマ

7/29.30　未解決事件シリーズ「グリコ・森永事件」（NHK）
8/5 終戦ドラマ「この世の片隅に」（広島テレビ）
8/12　〃　「犬の消えた日」（日テレ　軍用徴用犬）
8/13　〃　「最後の絆」（フジ　沖縄の兄弟）
9/4「雲仙・普賢岳～避難勧告を継続せよ」（NHK）
12/10「真珠湾からの帰還～軍神と捕虜第1号」（NHK 名古屋）
12/17「愛・命～新宿歌舞伎町駆け込み寺」（テレ朝　石橋冠）
12/23「帰郷」（テレ朝　渡哲也×渡瀬恒彦）
「レッスンズ」（関西テレビ　芸術祭最優秀賞）
3/6「それからの海」（NHK）
3/4「3・11その日石巻で何が起きたのか～6枚の壁新聞」（日テレ）

連続ドラマ

BS時代劇「テンペスト」7/17～NHKBS プレミアム
朝の連続テレビ小説「おひさま」「カーネーション」（NHK）尾野真千子
大河ドラマ「江」（NHK）
「坂の上の雲」最終シリーズ（NHK）
「キルトの家」（NHK）　脚本　山田太一　山崎努
「下流の宴」（NHK）　中園ミホ
「家政婦のミタ」（日テレ）脚本　遊川和彦
「妖怪人間ベム」（日テレ）
「生まれる」（TBS）　鈴木おさむ
「南極大陸」（TBS）　木村拓哉
「贖罪」全5回（WOWOW）

はたまらない。駅裏の大衆酒場で乾杯！それだけの30分プロだが人柄でもっているような番組。ファンは多い。

D　「ぶらタモリ」はC・Gの使い方が面白い。カマトト久保田のからみもNHKテック。

A　「爆門学問」は太田光が最近コうるさい。

B　ベニシアおばさんの「猫のしっぽカエルの手」（BSプレミアム）は里山風日本文化論だ。

C　「BS歴史館」「新日本風土記」「たけしのアート☆ビート」に実験絵画史風な「美の饗宴」、みんなNHKじゃないか。ヒト・カネ・ヒマがそろった知的道楽番組。ひがみか（笑い）

D　民放のバラエティーは安手の盛り場みたいなギンギラ・ヒナ壇ばっかしで食欲がどうもわかない。

【ラジオ】

A　阪神淡路以来、NHKは総合放送は災害の全般状況、全国ニュースとしての情報を扱い、教育放送とラジオで安否情報を扱う、というかたちが定着した。

B　ラジオOBが立ち上げた臨時免許局が大活躍した。ラジオ見直しの機運を生んだし、非常用グッズに手動電力ラジオが入っている。ケータイやスマホ聴取が若者に広がっている。

C　ラジコ利用者が増えたのはいいが、ラジオのクライアントの奪い合いも起こっている。皮肉だが、問題はアグレッシブなコンテンツの開発だ。

D　AM+FMの道州型ラジオと地域型コミュニティーラジオの再編成だ。ドラマとかドキュメンタリー（録音構成）といった重量型コンテンツは新しいラジオ再編成が前提となろう。

A　ラジオで最大の収穫といっていいのが、芸術祭大賞を受賞した毎日放送のラジオドラマ「鉄になる日」（小松左京『日本アパッチ族』より）。大阪に鉄を食べる新人類が出現して日本政府と戦争になる、という奇想天外な長編小説を換骨奪胎して、1時間聞いても飽きさせないドラマに仕立て上げた演出・島修一の力量は並々ならぬものがある。

B　音響効果の名人だった故・和田精さん（和田誠さんの父）の技術を脈々と受け継いだと思える若い効果マンたちが、戦闘音や鉄を食べる音を見事に作り上げたことも特筆しておきたい。映像化はとても無理な小説を使って、音だけで聴取者に想像させ展開していくラジオならではの醍醐味と可能性を示した。

C　原作の持つ関西ならではの権力への風刺精神を活かして、現在の大阪の息苦しさ＝ハシズムを笑い飛ばすパワーすら感じた。

D　芸術祭の受賞作では、ともに優秀賞を受賞したラジオドキュメンタリー、北陸放送の「浅川マキ～ロンググッドバイ」と山形放送の「それぞれの『異国の丘』～シベリア抑留者のいま」も心に残る番組だった。稀有な存在感を持つ歌手と作曲家の人生を描きながらその背景としての時代まですくいとって聴かせるのも、ラジオならではの魅力だ。

A　東日本大震災関連番組では、最も多く原発を抱える福井放送の「共生の民 40年目の衝撃」が、原発に頼らざるを得ない福井の現実に鋭く迫った労作。また、津波で大きな被害を受けた岩手県のIBC岩手放送のアナウンサーたちの証言を綴った「震災報道108時間」も心に残る貴重な番組。

B　過疎村の再生に結びつく「うんとこしょ　どっこいしょ～株式会社『大宮産業』奮闘記」（高知放送）も佳作。

【座談会】

3月2日（金）午後3時～5時半
千代田放送会館4階会議室にて。
出席　石井彰（書面参加）、伊藤雅浩、河野尚行、鈴木典之、藤久ミネ、堀川とんこう、前川英樹、松尾羊一
渡辺紘史

「深夜食堂２」（毎日放送）小林薫
「それでもいきてゆく」（フジ）
　　脚本　坂元裕二、　満島ひかり、瑛太
「マルモのおきて」（フジ）芦田愛菜、鈴木福
　　史上最年少の主役誕生
「陽はまた昇る」（テレ朝）　井上由美子　　佐藤浩市
「１１人もいる」（テレ朝）　宮藤官九郎
「鈴木先生」（テレ東）CP 岡部伸二、D 川合勇人ほか
「下町ロケット」（WOWOW）
「明日をあきらめない…がれきの中の新聞社」（テレ東）

活躍した個人

小島慶子（TBSラジオ「キラキラ」パーソナリティー）
柴田昌平（ドキュメンタリー「クニ子おばばと不思議の森」制作者）
渡辺真理（BS プレミアム「BS 歴史館」ナビゲーターの巧みな進行、展開）
渡辺あや（「カーネーション」「火の魚」「その街のこども」放送文化基金賞脚本、いずれもNHK。前年度向田邦子賞の最有力候補だったが何故か「該当ナシ」で話題になった）
満島ひかり（「それでも生きてゆく」「おひさま」「ぼくたちのようちえん」「開拓者たち」の演技）
小林薫（ドラマ「深夜食堂」の演技）
火野正平（「日本縦断こころの旅」BSプレミアム。視聴者が寄せた手紙を持って思い出の地を毎朝訪れる自転車旅。６３歳の火野の人柄による独特な紀行番組）
吉田　類（俳人　「酒場放浪記」BS-TBS　ナビゲーター）
柄本　明（「坂の上の雲」の乃木希典役、「妖怪人間ベム」）
ベニシア・スタンレー・スミス（「猫のしっぽカエルの手」BSプレミアム）
市川森一（故人　「淋しいのはお前だけじゃない」「モモ子シリーズ」「黄金の日々」「蝶々さん」など）

補遺

前号（1月発行）の締め切り後・発行後に届いた原稿がいくつかあります。時期が遅れてしまったのですが、ここで掲載します。

田原　茂行

一昨年秋から1年間、当会の寒河江正さんにも入っていただいた6人のメンバーで、「地域の再生活動と地域メディア」を主題に3月11日を挟み、全国取材調査をやりました。山形、福島、鳥取、熊本、鹿児島、北海道、富山、茨城、香川、神奈川、そして宮城と岩手の各局の現場と経営者、自治体広報担当、住民活動のメンバーを取材しました。その概要は、月刊民放2月号、GALAC3月号に書かせていただきましたが、春には、どこかで報告の会を開ければと思っています。地域社会の解体、衰弱が進む中で、地域局が、各地域に残した有形、無形の実績は大きく貴重なものです。しかし、赤字を重ねる各局自身がとことん経営の効率化に向かい、番組ノウハウの継承、イベントの存続に赤信号がともっています。対策が必要だと強く感じています。皆さまのお知恵をいただきたいと考えています。

＊

加藤　汕

今年の年賀状に生態学者吉良竜夫先生への哀悼の言葉を書きましたが、年賀状という制約上、言葉足らずで判りにくい箇所もあり、部数も僅かなので、内容を補足して採録することにしました。既にお読みになった方はお許し下さい。

尊敬する世界的な生態学者、吉良竜夫さんが昨年7月に他界されました。享年92歳でした。その「吉良竜夫さんを偲ぶ会」が大津で開かれ、秋の琵琶湖に行ってきました。大津は吉良さんが晩年所長を務められた琵琶湖研究所のあるところです。湖面には故人を称えるかのような虹が架かっていました。

吉良さんの専門は植物の生産生態学でした。生態学は範囲がとても広く、日本のお家芸であるチンパンジーの研究から植物まで、生き物の生きる姿すべてが含まれます。その中で生産生態学は個々の生物の生き方よりも、生態系全体をエネルギーの流れとして捉え、その中に普遍的な法則を見つけようとする学問です。

吉良さんの数々の業績中で最もよく知られているのは「最終収量一定の法則」です。たとえば一枚の田んぼに田植えをする場合、一株ずつ疎らに植えた場合と密植した場合の植物体の量を比べてみると、最初は当然密植した方が多いのですが、十分に育った後では同じになるという法則です。これはどんな植物でも同じです。一定の面積の田んぼに降り注ぐ太陽エネルギーが同じであれば当然の話なのでしょう。

我々は個別の生き物の不思議な行動や生き様に魅力に目を奪われ勝ちですが、それを超えた生物界の法則を地球規模で探ろうとする吉良さんのグローバルな視点はとても新鮮でした。

人間活動によるエネルギーの消費は生物としての20倍を超えており、それだけ大きな負荷を地球に与えているという警告は、世界の人口が70億人を超えたこの年にもう一度深く考えてみる必要があります。

吉良さんは晩年自然保護にも深く関わり、「里山」の大切さを説きました。最近の「里山ブーム」と言われていますが、そこへの道を最初に開いたのもこの方の力です。あらためて深いオマージュを捧げたいと思います。

＊

宇野　昭

新しい年の「ご挨拶」がすっかり遅れてしまいました。寄る年波に、耳・眼・脚の劣化・老化が進んで来ております。孫たちが小学校で〝戦争〟のことを学んで来たことがきっかけで『9条』の誓いを年の始めにして来ました。今年は震災がもたらした『原発』が重くのしかかっています。

手元に古い1枚のハガキが残っていました。82年（昭和57年）ヒロシマが世界に呼びかける、映像による平和祭「第5回ヒロシマ国際アマチュア映画祭」で、開校6年目の横浜放送映画専門学校（学院長・今村昌平監督）のテレビゼミで担当した映像報道班の卒業制作『われわれの原発白書』＝「原子力発電所」の安全を問うドキュメント、学生のアマチュア記者を応対する原発会社の態度が興味深い、8ミリフィルム・カラー・26分＝とあります（この回の「広島知事賞」受賞）。この作品、福井出身の学生の強烈なアッピールで、ゼミ生のほとんどが現地に泊まりこんで、原発会社だけでなく地域の人たちの反発も強く、取材は難航を極め、被曝者を長年追及し続けておられたフォトジャーナリスト・樋口健二さんにアドバイスをいただくなどしながらの取材現場に直接〈陣頭指揮〉の形にかけつけた記憶が甦りました。奇しくも『脱原発世界会議2012・YOKOHAMA』がこの15日まで横浜で開かれたことに想い及んで、なかなかペンを執れなかった今年の賀状。あのYOKOHAMAで学んだゼミ生たちに想いを馳せながら…。

訂正

前号の4ページ。織田晃之祐さんの原稿の最後の8行を左記に変えてください。

「音」は共振し響きあう。故に私は、その「音」の力、「音楽」の力を借りて、まなみちゃんと共振し響きあい、祈る。そして明日のまなみちゃんが、御両親の命名した字句どおりの、愛らしい、いとしい…海の大好きな少女に成長することを夢みながら…今、マルタのレコードに、そっと針をおとす。

第14回　放送人の世界

佐藤幹夫～人と作品～

今回はＮＨＫ放送博物館の肝煎りで会場を愛宕山に移し、同館ホールで行われた。１００席程度のコンパクトな会場ながらＮＨＫＯＢ、関係者など、横浜とは異にする常連客が多かった。

【上映作品】

3月10日　「破獄」「たけしくんハイ！」「約束の旅」「聖徳太子」

3月11日　「私が愛したウルトラセブン」「蝉しぐれ」「坂の上の雲～子規、逝く～編」。

対談・佐藤幹夫＋今野勉

佐藤幹夫氏

冒頭、浅野加寿子館長は「想定外の仕事をする人です」と佐藤幹夫を紹介して笑いをさそったが、作品歴をひもとくと、たしかに作品の振幅は激しい。以下、今野勉の巧みなさばきで光を当てた「想定外の仕事」を「佐藤語録」と作品との関わりを中心に紹介してみたい。

まず「破獄」（原作　吉村昭、脚本　山内久、出演　緒形拳　津川雅彦）。苛烈な監獄で脱獄を自己目的化している男の執念をエネルギーが暴発する「肉体で演技する」役者の身体演技と格闘した佐藤幹夫は「緒形拳は野獣です」と言い切った。本読みの際、一晩かけて納得したセリフをカットしたことに怒り狂った緒形拳は咄嗟に分厚い台本を真っ二つに破いた！以後、緒形と演出家の演技論が続く仲だったという。

その緒形の迫力に魅せられて生まれたのが傑作「海の群星（むりぶし）」だ。民俗学者谷川健一のルポルタージュを造形したいと起用した新進作家が池端俊策。

沖縄に残る奴隷制的な生活で鬼のウミンチュウ（親方=緒形拳）がヤトインゴ（雇い子集団）に潜水漁法を仕込む。苛烈な太陽の下で光る肉体の乱舞を豪速球で見るものをねじふせる演出で評判を呼んだ。ドラマサロンでは「佐藤ＷＨＯ？池端ＷＨＯ？」と騒がれた頃を私は知っている。

以来、池端とのコンビで後の「虹のある部屋」（演出　村上祐二）につながる「約束の旅」を作る。池端俊策の内的世界を共有した後、同じコンビで大河ドラマ「太平記」に1年を割く。これは足利尊氏サイドから天皇制の内実に踏み込む微妙な企画で、後年の問題作「聖徳太子」に引き継がれたと囃したもの書きがいた。それもあろうが、むしろ緒形拳のもつ演技的スケールに吸引されたドラマだったのかもしれない。

一方、梨園の出自を隠し、無名のタレントで最高学府から唐突に芸の世界に飛び込んだ役者志願がいた。当然好奇の目に翻弄され役者の域に及ばぬ長い雌伏の時代を経て、香川照之は岩崎弥太郎（「竜馬伝」）そして正岡子規役で一挙に爆発した。

「坂の上の雲」の「子規、逝く」編を担当した佐藤幹夫は、病める子規の肉体に信じ得るもうひとつの「明治」を象徴させた。痩せ細った子規が病床で「わしゃまだまだ、ええ句が浮かんできよるんじゃ」と泣いて軍装の秋山真之の手をとるシーンのすごさ。

香川照之は子規に成り切るために15キロも体重を落として現れたという。そのシーンを撮り終えた香川に「緒形さんを超えましたね」と最高のオマージュで報いたと佐藤監督。

「監督」と書いた。早い時期に早坂暁と組んで「監督」をあえて自称した先輩、深町幸男は映画畑から転身してテレビの中に映画を紡いでいた。吉永小百合に原爆症の芸者という厳しいロマンの側面を灯したその文脈上に佐藤幹夫がいた。周辺には石橋冠や鶴橋康夫、杉田成道など「組」を擁する「監督さん」が自然発生的に台頭していた。

テレビドラマの世界では、生本番で右往左往する現場の仕切りは創世期はスタジオ処理係風なディレクターにおわされた。やがてＶＴＲ、照明、デジタル編集、Ｃ・Ｇ技術が入ってくる。ワン・カメを駆使して独自な映像表現ができる。それはディレクターではなく、今や監督の仕事に違いない。何らの抵抗感もなく映画に飛び込むテレビマンも出て来た。では映画とは異種のテレビ監督とは何者か。

「蝉しぐれ」で側室のおふくを救おうと家老屋敷まで川を利用して逃げる夜の闇をあり得ない照明でテレビの道行として描いた。それを鋭く共感の思いで指摘した今野勉は、真のリアルとは何かと、結論が先にあるようなドキュメンタリーの拝跪型リアリズムの風潮へ疑問を呈した。

「坂の上の雲」の２０３高地をめぐる死闘や日本海海戦描写にみるＣ・Ｇ合成技術は「ロマンもまたリアリズムである」と言った横光利一の夢想を現実のものとしつつある。

焼けた鉄塊が降りそそぐ戦場の修羅場はロシア軍も日本軍もない。累々たる屍体と多面的なロケで合成された「戦場」のむごさが響いた。「坂の上…」は多くの「誤読」にまみれている。「正読」が期待できないのは司馬遼太郎本人も知っていたのだから。

ここで私は佐藤監督の「世界・わが心の旅」枠の「ローマ～父の面影　旅人脚本家竹山　洋」を思い出す。

疎遠だった父へのトラウマを秘める竹山洋をローマ市街にほうり出す一方で、終始画面ではデ・シーカの「自転車泥棒」を挿入する。「そう、たしかこの壁です」と竹山が指さす壁に梯子をかけ

ポスターを張る男（素人役者）ランベルト・マジョラーニが自転車を盗まれてしまう…やっとの思いでありつけた仕事も自転車がなければとすねる息子をなだめすかして血まなこになって探すが見つかるわけはない。おもいあまって他人の自転車を盗んでしまうが、群衆に囲まれ、警察に逮捕される。「パパ！パパ！」と息子ブルーノが絶叫する。許され帰路につく親子。手をにぎりあう親子の遠景が映画のラストシーンだったが、佐藤監督は成人した素人子役のエンツオ・スタヨーラを見つけだした。気のいい中年男に堕していた男に少年ブルーノと「少年竹山」を重ね、映画と同じ食堂でチーズ料理を食べる。ローマ市街と映画と竹山の過去。竹山洋はこのドキュメンタリーの不思議な構成にあらがうすべは無い。突然慟哭する竹山洋。イタリアン・レアリスモの出会い、という二重構造の中で生まれた竹山洋の涙。メチャ面白く残酷な感動の原点を衝くことで、逆にドキュメンタリーの「ウソ」を衝き、逆利用したまさに「監督」の業（ごう）をみせた作品だった。これだからテレビを見るのがやめられないのだ。

（文責　松尾羊一）

今野　勉氏

ラジオのページ

録音構成ラジオドラマ
～東京キッド

その8　**武本宏一**

先日開かれた放送人の会、幹事会の席上、何かのはずみでラジオドキュメンタリーの話が出た。

その時、松尾羊一さんが「いや、昔はラジオドキュメンタリーなんて言わなかったよ。録音構成と言ったんだ」と発言された。

そこで思い出したのが、ラジオ東京（現ＴＢＳ）の録音構成の全盛時代。

私がラジオ東京のラジオ制作部に配属された1963年、そこで先ず目にしたのは、重そうなデンスケ（取材用可搬型テープレコーダー）を肩から下げ、忙しげにゼンマイを巻きながらエレベーターに駆け込んで行く、植草慎二郎・北村美憲といった「ラジオスケッチ」担当の先輩たちの勇姿だった。

「ラジオスケッチ」は、その時々の社会情勢の中から、毎日一つのテーマを選び出し、担当プロデューサーが当事者へインタビュー、または現場の状況なども収録して再構成する、毎日15分の報道番組だった。

「〝ラジスケ〟を1回でもやらないうちは、一人前のラジオマンとは言えんよ」…。

さて、初め音楽班に配属されて、録音構成とはなかなか縁のなかった私に、ある日思いがけなくも、その産みの苦しみと醍醐味を味わう日がやって来た。

1966年、その年の民放祭賞ラジオドラマ部門の企画に、私の提案が局で採用された。

それは、当時放送の世界でも頭角を現しつつあった寺山修司氏と組んで、全く新しいタイプのラジオドラマを創り出そう、というものだった。

寺山氏との初の打ち合わせは、ＴＢＳ隣の喫茶店〝憩〟にて。暑い日で、氏はスリッパをバタつかせながら現れた。

ガラナジュースを飲み終わると、氏は早速切り出した。

「ほら、美空ひばりの〝東京キッド〟っていう歌があったでしょ。あの中に、右のポッケにゃ夢がある、という歌詞があるよね、あれにちょっとこだわってみようかと思うんですよ」

氏の構想はこうである。

1、戦後20数年を経たが、終戦後誰しも胸に抱いていた〝夢〟は、いまどこへ行ってしまったか。現代の東京に住む人たちの今の夢は何かをあらためて探し出してみる。

2、シナリオはこの際一切無しとする。すべては街の声を集めた録音構成番組とする。

「ということは…」

「あとは全部武本さんの取材におまかせですよ。ハッハッハ」

「寺山さん、笑声と共に去って行ってしまった。

翌日から私は早速、インタビューアーの新人アナ岩崎直子さんと共に、デンスケをかついで東奔西走した。

「あなたの右のポッケには、何が入っていますか」

「あなたの夢は何ですか」

タクシーの運転手さん、屋根ふき職人、球場の巨人ファン…。ぼう大かつ多様な〝現代人の夢〟を収録し編集し、スタジオでひばりの〝東京キッド〟の歌声をオーバーラップさせて番組はやっと完成した。

オンエアの翌日、私は局の廊下で、ラジオの先輩でもあり、数年後には私をテレビマンユニオンに勧誘してくれることになる萩本晴彦さんから声をかけられた。

「聴いたよ。面白かった。」

この一言が、今でも私の勲章である。

公開トークショー・人気番組メモリー

ザ・ベストテン

3月24日（土）13時30分～　横浜情文ホール
ゲスト　生島ヒロシ（追っかけマン・司会）、**山田修爾**（制作）
遠藤　環（演出）
司会　吉川美代子（ＴＢＳアナウンサー）
放送人の会会員の席はあります

放送人の証言・収録者一覧

2012年2月末現在

No	証言者	出身社等	収録年
1A	故・辻　好雄	NHK大阪	99
1B	作本　秀信	NHK大阪	99
2	故・高橋太一郎	TBS	99
3	故・岡本愛彦	NHK・TBS	99
4	吉村　繁雄	ABC	99
5	故・藤倉　修一	NHK	99
6	西沢　實	放送作家	99
7	長沢　泰治	NHK	99
8	北川　信	NTV	00
9	八橋　卓	テレ朝	00
10	浅田　孝彦	テレ朝	00
11	故・秦　豊	NHK・RKB	00
12	関谷　則	NHK	00
13	島地　純	文化放送	00
14	津田　昭	NTV	00
15	蟻川　茂男	TBS	01
16	故・加藤　静夫	TBS	01
17	大山　勝美	TBS	01
18	橋本　潔	NHK・テレ朝	01
19	故・小倉　一郎	NHK	02
20	石井ふく子	TBS	02
21	川口　幹夫	NHK	02
22	川野　楠巳	NHK	02
23	荻野　慶人	読売TV	02
24	故・山本隆則	TBS・テレ朝	02
25	小川　秀夫	文化放送	02
26	故・堀江史朗	NHK・博報堂	02
27	故・和田　勉	NHK	02
28	嶋田　親一	フジ	02
29	澤田　隆治	ABC	02
30	松本　明	ABC	02
31	故・川竹　和夫	NHK	02
32	故・フランク馬場	GHQ・CIE	02
33	岡田太郎	フジ	02
34	故・香西　久	NHK	02
35	鈴木　道明	TBS	02
36	原田庸之助	電通	02
37	村上　七郎	フジ	02
38	森川　時久	フジ	02
39	故・柳澤　恭雄	NHK・電波N	02
40	中道　定雄	NHK	02
41	故・田　英夫	共同・TBS	02
42	佐藤　年	CBC	02
43	国枝　忠雄	CBC	02
44	故・田中　亮吉	TBS・テレ朝	03
45	故・高橋　啓	CIE・TBS	03
46	池田　義一	NTV	03
47	合川　明	NHK	03
48	故・久野　浩平	RKB・テレ朝	03
48A	斉藤　守慶	MBS	03
49	宇野　昭	TBS	03
50	大友　虎勝	TBS	03
51	武谷　雅博	TBS	03
52	吉本　琢也	TBS	03
53	石川　純昌	TBS	03
54	岩井　禧周	NHK	03
55	深町　幸男	NHK	03
56	吉田　直哉	NHK	03
57	津川　溶々	TBS	03
58	岸田　功	NTV	03
59	遠藤　利男	NHK	03
60	沖野　瞭	NHK	03
61	故・村木　良彦	TBS・テレビマンユニオン	03
62	真船　禎	TBS	04
63	武　敬子	RKB	04
64	新井　和子	TBS	04
65	太田　泰子	TBS	04
66	近藤　晋	NHK	04
67	近藤　康弘	NHK	04
68	北代　博	TBS・テレ朝	04
69	村主　彦	NHK	04
70	川平　朝清	NHK	04
71	香川　宏	NHK	04
72	故・横沢　彪	フジ	04
73	藤井　潔	NHK	04
74	吉川　史弘	RKB	04
75	岩崎　英雄	NHK	04
76	故・大和　定次	NHK	05
77	土居原作郎	NHK大阪	05
78	山内　久司	ABC	05
79	野添　泰男	関西TV	05
80	末次　摂子	読売TV	05
81	福富　哲	テレ朝	05
82	小田久栄門	テレ朝	05
83	坂上　健司	TBS	05
84	故・吉村　光夫	TBS	05
85	石井　康博	NTV	05
86	池田　徹朗	MBS	05
87	磯村　尚徳	NHK	05
88	山崎　俊一	NHK	05
89	清水　満	NHK	05
90	木村　忠夫	大映・TBS	05
91	菱田　市彦	TBS	05
92	石川健太郎	NHK技研	05
93	故・木村　栄文	RKB	05
94	大場　正男	京城・RKB	05
95	岡崎　栄	NHK	05
96	野崎　茂	民放連研	05
97	故・大脇　明	CBC	05
98	井沢　慶一	CBC	05
99	神山　繁	NHK・テレ朝	05
100	坂倉　孝一	NHK	06
101	原　恒夫	俳優座・東宝	06
102	伊藤　豊	TBS	06
103	宿谷　禮一	TBS	06
104	小南　武朗	HBC	06
105	故・守分　壽男	HBC	06
106	石橋恵三子	生花・消えもの	06
107	村野　賢哉	NHK	06
108	故・佐藤　秀山	文学座・TBS	06
109	吉澤　保	TBS	06
110	能条　三郎	NHK	06
111	鴨下　信一	TBS	07
112	栃木　始	テレ朝	07
113	斉藤　暁	NHK	07
114	松尾　羊一	文化放送	07
115	勝部　領樹	NHK	07
116	松本　忠久	TBS	07
117	大野木直之	フジ	07
118	戸国　浩器	フジ	07
119	山室　英男	NHK	07
120	牛山　剛	テレ朝	08
121	杉山　邦博	NHK	08
122	湯浅　正次	NHK	08
123	大越　幸夫	TBS	08
124	織田晃之祐	NHK	08
125	富樫　直人	NHK	08
126	田原　茂行	TBS	08

127	金子　鮎子	NHK	08
128	磯野　恭子	山口放送	08
129	鈴木　昭典	ABC	08
130	山川　静夫	NHK	08
131	武井　照子	NHK	08
132	後藤　美代子	NHK	08
133	滝　大作	NHK	08
134	48Aに代わり欠番		
135	井上　加寿子	RKB	09
136	渡辺　泰雄	NHK	09
137	青木　賢児	NHK	09
138	小林　俊一	フジ	09
139	故・舘野　昌夫	NHK	09
140	岡田　晋吉	NTV	09
141	池松　俊夫	NTV	09
142	斉藤　太朗	NTV	09
143	仲村　庄司	NTV	09
144	須之部　淑男	NHK	09
145	相田　洋	NHK	10
146	宮本　章二	NHK	10
147	藤尾　孝	NHK技研	10
148	葛城　哲郎	NHK	10
149	宝官　正章	TBS・テレビマンユニオン	10
150	金森　千栄子	北陸放送	10
151	田原　総一朗	TV東京	11
152	広瀬　嘉夫	NHK	11
153	鈴木　健二	NHK	11
154	藤竹　暁	NHK文研	11
155	兼高　かおる	キャスター	11
156	後藤　亘	FM東京	11
157	今野　勉	TBS・テレビマンユニオン	11
158	寒河江　正	TV神奈川	11
159	植村　鞆音	NTV	11
160	野崎　元晴	NTV	11
161	市岡　康子	NTV・日本映像	11

〈放送人の証言〉事務局　作成
証言者のご消息をご存知の方は事務局までお教えください。

放送人の会・総会

日時　5月19日(土)
午後2時～(6時30分)
会場　NHK青山荘
1階大ホールけやき(03-3400-3111)
(東京メトロ銀座線表参道駅下車、A5出口右へ30m、稲荷神社右折左側。徒歩1分)
会費　4000円
(会場費と懇親会参加費)
議題
(1) 新幹事・代表幹事の承認
(2) 代表幹事あいさつ
(3) 2011年度活動報告・会計報告
(4) 2012年度活動方針・予算案
(5) 幹事の担当選任、その他
午後4時～
「放送人グランプリ2012
(第11回)贈賞式」(同会場)
懇親会(午後5時すぎからの予定)

第31回放送人句会

◇平成24年3月7日(水)◇於…麦屋
◇出席…上村暁蛙、荻野慶人、中島丈博、新村もとを、橋本きよし、藤森いずみ、細川直子、森治美、西川阿舟(9人)
◇不在投句…鶴橋康夫、豊田まつり、山県ぽん太
◇兼題…如月、椿、蛤、どや顔

九十媼笑まへば乙女椿かな　まつり
春の陽を浴びてどや顔一年生　いずみ
蛤の紅溶く殻を選りもして　まつり
四万十の瀬に身を揉んで落椿　丈博
花も葉も色濃き椿深大寺　暁蛙
この世をば如何に思ふや落椿　慶人
球春にどや顔あれば泣き面も　慶人
岸和田の嫁女の帯や紅椿　丈博
隠れ家で蛤汁に舌鼓　慶人
如月の地震(なゐ)又ありて涜職も　もとを
如月や譲りし羽織惜しくなり　丈博
如月のギヤマンの杯紅光る　きよし
蛤吸に階段で事故ありしとか　まつり
蛤も目覚めて木の芽のぞきけり　康夫
姑がどや顔みせる雛祭　治美
どや顔をして雁風呂を解説す　阿舟
椿落つ言葉途切れてふたりだけ　康夫
椿揺れチチチと目玉顔を出し　直子
婉然と曲り廊下に椿あり　治美
如月や馴染みの店がまた潰れ　暁蛙
椿落つ母縁側で動かざる　いずみ
如月の風にまかるる男女かな　治美
鍋に入るゝ時蛤の鳴きにけり　阿舟
如月や風土記の丘のゆるやかに　きよし
落椿十歩のほどに眠る猫　きよし
うとましき座敷を出し椿かな　治美
如月の己と女憎みたり　まつり
如月の雨を乗せゆく小舟かな　治美
如月の水重たげに多摩の川　暁蛙
如月の瀬戸の早潮止りけり　きよし
おもかげの人魚伝説紅椿　ぽん太
落椿ワシハ誰と問ふ人と　ぽん太
記憶とはたゞ如月の暴れ海　ぽん太
如月や亡き人の声遠ざかる　丈博
蛤の涙のあとや通夜の膳　丈博
この赤を千年伝へしこの椿　暁蛙
落ち椿、機関車、駅舎、逃避行　康夫
椿落つ流人墓とて風の中　ぽん太
如月も入口辞林の奥深し　慶人
如月のマリア観音憂ひ顔　暁蛙
右は断崖左つらつら椿かな　阿舟
椿落つポトリと音のしたやうな　慶人
春場所やどや顔アップ返り咲き　慶人
どや顔の童女の背なの雛飾り　丈博
吊り橋を見上げる崖の叢椿　もとを
如月の雨に抱かれる隠れ旅　康夫
賑はしきどや顔さへも朧にて　ぽん太

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

次回放送人句会
◇5月9日(水)18時頃から、19時投句締切(7句投句)
◇於…麦屋(**Fax03-3586-0056**)
◇兼題…祭、筍、その他初夏の季語を使った句(当季雑詠)も可。立稽古(初夏の季語を入れて)

第31回・名作の舞台裏

12年2月21日(火)　横浜情文ホール

黄金の日々

（ＮＨＫ・１９７８年放送）

パネリスト

松本幸四郎＝配役　呂宋助左衛門役

竹下景子＝配役　しま、桔梗役

近藤晋(制作・NHK)

髙橋康夫(演出　NHK)

司会　渡辺　紘史(放送人の会)

主催　放送人の会・放送番組センター

松本幸四郎さん

会の前半は第1話「信長軍包囲」と第31話「竜虎相撃つ」の上映。後半がトークである。

渡辺　この企画は市川森一さんが出席して行われるはずでしたが、市川さんが亡くなって一度頓挫しました。しかし、市川さん追悼の意味でやろうと言うことになって今日の会になりました。

松本　私はここで懐かしい思い出を語ろうとは思いません。テレビのドラマはその瞬間瞬間を生きているのだ、あの一瞬、一瞬の積み重ねが人生だ、テレビは役を演じるのでなくその役を生きるのだ、と思っています。「黄金の日々」はそんな日々でした。

竹下　あの頃は何も考えていなかったのだと思います。「大河」は雲の上のもので、とてもとどかないところにあると思っていました。すばらしい機会を与えていただきました。

いま見ると、ああして幸四郎さんの胸に飛び込んでいたのですね。

松本　いまもあのときのあたたかさが胸に残っています。

髙橋　35年ぶりに凛々しい幸四郎さんと可愛い竹下景子さんをみて、ああ楽しい仕事だった、と思いました。私にとって3番目の演出ですがあれは黄金の日々でした。

松本　フィリピンのロケでは、朝、鶏が鳴くと高橋さんがみんなを起こし、サハリルックで颯爽と出かけます。気温40度。まわりの民家の中はキリストの絵が1枚あるだけで何にもない。そこから出てきた黒山のようなエキストラと撮影です。竹槍を持った彼らの眼は只者ではない感じでした。帰ると高橋さんのサハリルックはどこへやら、ランニングもズボンも緩め、大いびきで寝ていました。

近藤　NHKのドラマ部は肩身がせまく、廊下の隅をこっそり歩いていた時代です。それまで「大河」は武将のドラマで商人が主人公のものはなかったので、やってなかったものをやろう、庶民の眼からみたドラマ、軍事力でなく経済力のドラマを考えました。信長は鉄砲を使ったがその火薬を売ったのは堺の会合衆（えごうしゅう）です。

近藤晋さん

城山三郎さんには「ブラウン管に小説を書いてください」と頼みました。市川さんは新進気鋭の脚本家、城山さんは「堺は北欧のギルドに通じる」と強い興味をお持ちでした。

この企画の前に部長には壬申の乱の企画を出し、部長は最初は「おもろいなあ」でしたが、しばらくして「あれはあかんで」。天皇家の近親相姦を扱うドラマはやれない、というのでその代り「黄金の日々」では①海外ロケ②新しい配役③小説家と脚本家がいったいとなって仕事をすすめる、の条件をのんでもらいました。

市川染五郎さんは61年日テレで放送した梶井基次郎原作の「檸檬」と舞台の「ラマンチャの男」をみてこの人しかないと思っていました。

松本　「檸檬」の頃は生放送で、太いケーブルがスタジオのフロアを埋めていて、それを2，3人で捌いていた。ウソのような話ですが、本番中、台詞を言いながら衣装を変えていました。

「黄金の日々」のときは「役を生きるのだ」と覚悟して、1年半舞台をいっさい休みました。かつらの時は長剃りをしますが、この役は総髪でしたから半かつらで毎日地毛に地繰りをしてもらいました。衣装は自分の着物で、衣装係の熊谷さんから薦められてキャピタン縞という生地を買いました。

髙橋　近藤さんは立派な理念を持って始められたのだと思いますが、ルソンのロケは苛烈を極めました。炎暑の中で幸四郎さんは凛々しく立っているのですが、エキストラはちょっと中断するとさっと木陰に入る。彼らは「ニッポン、カミカゼ！」と言いましたが、われわれは途中一度も小便をしない。水分は全部汗になるのです。頭もぼーとしている。夜、撮影したものをみんなでみますが杉山カメラマンが「オレ、こんなカット撮っていない」と言う。カメラマンは彼ひとりだからそれはあり得ない。記憶が抜け落ちるのです。

髙橋康夫さん

渡辺　第1回は国内ロケで生田のオープンセット。読売ランドのそばの学生用

ホテルに泊まり、2，3時間仮眠すると起こされた。2つのチームが同時進行で「こっちが本番」と交代で撮影し、役者はあっち行き、こっち行き、秀吉の陣屋の場面は撮り終ったら日差しが逆になっていました。

竹下　鉄砲のシーンは本当に撃ったのです。指導していただいて言われるままに引き金を引くと火花が出る。それで幸四郎さんが顔に火傷なさった。

竹下景子さん

近藤　幸四郎さんは目を押さえていて、「すぐ病院へ」と言ったのですが、このシーンだけは、と撮りました。だから、あのシーンの右目は開いていません。

渡辺　幸四郎さんへの水攻めもありました。船の上を3台のカメラで狙い、ADは水夫（かこ）に水をかける。幸四郎さんの眼にも水が入るが身じろぎもしなかった。

松本　トーク番組では話を2、3分も聞くとその人の人間性がみえてきます。テレビのロケはマルチで撮ると演技する以前のものが映っています。「す」「ナマ」「生きる」そのままです。「黄金の日々」には詩情あふれる台詞がありましたね。

高橋　アングラの舞台から李礼仙、根津甚八、映画から川谷拓三など若い役者を育てていこう、といろんな場を作り丁寧な本読みをしました。鶴田浩二さんは静かで「そこに居る」という存在感がありました。

近藤　鶴田さんからは「由井正雪のような総髪にしたい」との注文がありました。利休は茶人というより政商です。武将への恩賞に土地ではなく茶道の名器が与えられるようにした人物です。この描き方に裏千家、表千家から抗議があり、了解を得るために訪ねますと、千家の宗室は元特攻隊で、鶴田は特攻隊の整備兵だったのですが、「鶴田の特攻隊への態度で彼を信じる。ほかの人ならNOだが鶴田浩二ならYESだ」とOKになりました。

鈴木嘉一（会場から発言）　「大河ドラマ50年」という本を書き、50の作品を辿りました。2ページでさらっと書いた作品もありますが、「黄金の日々」は10ページです。新機軸で作られた作品で出演者も唐十郎の一座の面々、鹿賀丈史など異種格闘技のおもむきで、「大河」でなければできないものがかもしだされていました。助左衛門は小牧・長久手で秀吉の兵站線として戦いに巻き込まれる。戦いに巻き込まれる庶民は「獅子の時代」の菅原文太もそうですが、原点は「黄金の日々」ですね。

松本　市川さんの思い出はたくさんありますが、娘の松たか子がガラスの人形をとどけると「僕はミカエルになってたか子さんを見守ります」と言われました。純粋にテレビから出た最初の大作家でしたね。

竹下　私は市川さんの本で育てられました。先生はみんなで楽しく過ごすことが大好きで、集まると若い世代と同じでした。私の宝物はモモ子シリーズです。これは市川さんでなければ書けないもので、私を全く知らないところに連れて行ってくれました。キリスト教徒として根底から人に接する優しさがあったと思います。

高橋　血なまぐさい戦国時代を描いて、残酷だけどその登場人物をいとおしんでいた作家です。これからの作家はかれのロマンを引き継いで欲しいですね。

市川さんに好きな女優さんは？と聞いたことがあります。返事は「竹下景子ちゃん」でした。

竹下　え？　まあ！

会の終わりに「黄金の日々」の最終回を上映した。

堺は焼かれ、船と言う船が郊外に避難し、その中を助左衛門の船が進む。燃えさかる炎、切り裂くような風の音にまじって悲鳴も聞こえてくる。その中に美緒の最後もあるはずだ。

そのシーンに市川森一の詩のようなナレーションが流れる。

「自由都市堺は紅蓮の炎となって天空に吸われて行く。再びよみがえることのない夢と黄金の日々」

「カーネーション」は終章だが、女は不浄で山車の上で踊り狂う大工方に はなれない。ひるまず彼女は「わての ダンジリはミシンやで」と啖呵を切って前へ進む。パワフルな行動力でねじふせるカッコよさは従来の朝ドラヒロイン像を超えた。例外は吉行美容室の「あぐり」ぐらいだが、明るく美しい地方出身の娘が上京して幸せを掴むニコニコ路線の朝ドラパターンは「カーネーション」の成功で変わるかもしれない。

たとえば戦中戦後にかけて沖縄の女海賊と言われ、沖縄独立を叫んだ女性がいた「沖縄独立を夢見た伝説の女傑　照屋敏子」（高木凛著　小学館）である。敗戦直後、福岡の地で飢えに苦しむ沖縄漁民を組織し助けた親分肌の豪快な女だ。彼女の言い分を聞こう。「沖縄の島はあんた、あくまでも琉球人のものですよ。かつては沖縄王国だったんだ。それを日本が母国のように言う。いまさらなんだ」「いまの沖縄の人は自分の力で生きていこう、という根性が欠けている。キンタマはシンブン（知恵）と根性ということなんですよ。

また作家火野葦平の母といえば「花と竜」だが、玉井家を統率し、川筋者を従え鉄火肌で北九州を睥睨した女だてらだって痛快！朝ドラ・ヒロインになるんじゃないか。要するに朝のテレビ小説がこじんまりした女性観の枠組みから脱して、新しい女性像を骨太に描き切る時代に入ったと言いたい。

（M）

会員名簿

2012.03.16 現在

【あ】青木裕子　赤井朱美　秋田完　秋山豊寛　雨宮望　新井和子　【い】石井彰　石井清司　石井ふく子　石高健次　石橋冠
磯野恭子　磯村健二　市岡康子　市村元　一色伸夫　伊藤雅浩　井上良介　今井義典　岩澤敏　【う】上村忠　碓井広義　臼杵敬子
歌田勝彦　宇野昭　【え】江口展之　遠藤利男　遠藤ふき子　遠藤雅充　【お】大蔵雄之助　太田敬雄　大西康司　大西文一郎
大原れいこ　大山勝美　大類啓　大脇明　岡弘道　岡田晋吉　緒方陽一　岡村黎明　小河原正巳　沖野暸　荻野慶人　小田久榮門
織田晃之祐　【か】加賀美幸子　各務孝　片岡敬司　勝部領樹　葛城哲郎　加藤滋紀　加藤辿　加藤義人　金沢敏子　金子登起世
兼歳正英　金平茂紀　加納孝夫　鎌内啓子　上安平洌子　鴨下信一　川口健一　川口幹夫　河村正一　【き】岸田功　北川泰三
北川信　北出晃　北村美憲　北村充史　木村成忠　【く】楠美昌　工藤英博　久保志穂　隈部紀生　【こ】小池勝次郎　河野尚行
児玉久男　後藤和晃　小南武朗　近藤晋　今野勉　【さ】斉藤伸久　斉藤秀夫　斎明寺以玖子　酒井美樹男　寒河江正　坂元良江
桜井均　佐々木彰　佐々木欽三　佐藤年　澤田隆治　沢田隆三　【し】重延浩　重村一　静永純一　嶋田親一　清水満　下崎寛
下重暁子　城菊子　白井博【す】菅野高至　杉澤陽太郎　杉田成道　鈴木昭典　鈴木克明　鈴木典之　鈴木道明　須磨章
【せ】せんぼんよしこ　【そ】曽根英二　【た】高島秀之　武本宏一　田澤正稔　田中昭男　田中秋夫　田中直人
田中則広　田原英二　田原茂行　【ち】千葉勉　【つ】辻本昌平　露木茂　鶴橋康夫　【と】土居原作郎　堂本暁子　戸田佳太
外崎宏司　豊田由紀子　豊原隆太郎　【な】中崎清栄　中島僚　中田美知子　永田浩三　長沼士朗　永野敏一　中村敦夫　中村克史
中村季恵　中村耕治　中村敏夫　中村芙美子　中山和記　難波秀哉　【に】新村もとを　西ヶ谷秀夫　西川章　二宮文彦　丹羽美之
【の】信井文夫【は】萩野靖乃　橋本潔　林健嗣　林裕史　原由美子　原田庸之助　原田令嗣　【ふ】深町幸男　藤井チズ子
藤田晋也　藤久ミネ　【ほ】星田良子　堀川とんこう　【ま】前川英樹　松尾羊一　松平定知　松前洋一　松本明　松本修
松本国昭　【み】三上義智　水上毅　水野憲一　三原治　三村景一　三村千鶴　宮川鑛一　三宅恭次　明神正　【む】村上光一
村上雅通　村上佑二　村田亨　【も】諸橋毅一　【や】八木康夫　矢島良彰　薮内広之　山県昭彦　山崎隆保　山崎裕　山路家子
山田尚　山田良明　山根基世　【よ】横山英治　吉澤保　吉永春子　吉村直樹　【わ】渡辺紘史

訃報

高橋一郎

3月5日にすい臓がんにより逝去。享年77歳。早稲田大学政経学部卒。昭和34年TBS入社。ドラマ制作一筋、主な演出作品。「関ヶ原」「淋しいのはお前だけじゃない」「高原へいらっしゃい」渡辺貞夫、小室等の二人をドラマの劇伴音楽に起用。新風を吹き込んだ。二人との深い親交が現在まで続いていた。最近は舞台「マクベス」（2010年）「秋吉敏子上海コンサート」（2011）など、テレビ以外でも旺盛に活動していた。

会員近況

「眠れる壁画の美女」～修復で発見した600年前の技法に迫る～

制作　辻本昌平、中崎清栄

（テレビ金沢）

フィレンチェのサンタ・クローチェ局界には巨大なフレスコ画法による壮大な壁画「聖十字架物語」がある。作者は幻の大画家アーニョロ・ガッティ。600年を経て壁画はボロボロだが資金難で修復ができない。篤志家の寄付を得て、金沢大の研究者宮下丈晴教授が修復を主導し、イタリアの関係者と学生たちのプロジェクトを組み、フレスコ画の困難な復元にいどむ。

先般、フィレンツェと金沢大学を結ぶ復元の模様を描いたドキュメンタリーがテレビ金沢で放送された。そのDVDが届きましたので関心のある方はお申し出ください。（M）

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

編集後記

▼紀尾井町にもアセビ（馬酔木）の花が咲き、雑草のスズメノカタビラの花も咲きました。寒い日が続きましたがもう春です▼恒例のグランプリ下馬評座談会をお届けします。正直に告白しますと、この座談会の録音には失敗しました。機器はオリンパスのボイスレコーダーで信頼度は高く、座談会の前に「これから始めます」とテストしてOK。録音のボタンを押して座談会の最中は録音レベルを示す赤いランプが点滅していたのですが後でどこを探しても録音された音は出てきませんでした。途方にくれましたが、座談会出席者の皆さんにメモを出していただき、松尾羊一さん、鈴木典之さんにそのメモと記憶で原稿にしていただきました。出来上がりは冷汗三斗の思いをしたわりにはまずまずだとおもいます。みなさんご協力ありがとうございました（視郎）